
やままに

行天大翔

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

やままに

【Nコード】

N4257D

【作者名】

行天大翔

【あらすじ】

山の間荘の住人である僕とお隣さんのみい姉さん、そしてその後出てくる住人ANDその他諸々が繰り広げる、ほのぼの系ネガティブコメディといったところです。

やままに

第一話 くみい姉さんと僕

朝と聞いて「苦しい」と思うのは、羽目を外し飲み過ぎた二日酔いのサラリーと生まれつき超低血圧のお姉さんぐらいだろう。ついでに低血圧つという設定はお姉さんにしか適用されないものだと思っただけの中、法律で決まっている。

さて、朝の清々しいはずの朝日がどうにも今日の僕には寝苦しいものようだ。じりじりと額に紫外線を浴び、何だか息苦しくもある。四肢は動かしているはずなのだが、関節のところで止まってしまう。

一人暮らしを始めたばかりなので金の節約のために布団は安いものを買ったため、薄く、もう春なのにいつも肌寒い感覚がするはずなのに今日に限ってなにやらぬくぬくと暖かい。実家で飼っていた猫が毎朝僕の上で寝ていたのをほんの少しだけ思い出した。

ほんの少し思い出したところでやたらと重いものが僕の上に乗っていることに気づく。いくら寝相が悪くても昨日寝る前に読んでいた約一年分のマンガ週刊誌を積み上げることはないだろうから他のものが乗っているのだろう。

「……お、おもい」

乾燥した喉のせいで、まるで砂漠で枯れてしまった冒険者がたまま出くわした行商人に水を乞うような声が出てしまった。

ドスッ

声を出してすぐに僕の腹部に鈍痛が走った。

「がっ うえっほ！」

寝ている間に昨日の夕食は消化されてしまっただろうが、そのために分泌された胃液はまだ残っていたらしく、むせた後すぐに喉が焼けるように痛んだ。

「えほ！ げえほ！ な、なん…だ！」

ようやく目を覚ました僕はいきなり自分の無防備な腹を襲撃した

やままに

原因さんを見た。

「……………」
そこには目を吊り上げて、口に一線を引き、腕を胸の前で組んで、僕のマウントポディション見事に奪っていた女性がいた。そして僕にはその女性に見覚えがあった。

「……………」どうしたんですか？　みい姉さん、朝っぱらから。ついでに可能でしたら同じアパートとはいえ男の部屋に入り込んでマウントポディションを奪う珍行動の説明もお願いします」

取りあえず僕は、腹の上にいる社会のマナーを無視した行動をとっている^{あさみ}美韻さん、^{みいん}「山の間荘」の住人の間では「みい姉さん」として呼ばれてるお方に枯れた声で尋ねた。

「……………」
みい姉さんは僕の問になんか耳を貸さず、未だ怒ったような顔でこちらを無言で睨みつけていた。

なんだっていうんだ……
そうは思ったもののさすがに人の体重がのしかかっているのであり悠長にしているわけにもいかず、何か話そうと思った。が、その前にみい姉さんの格好に目が引かれた。

普段は暖かそうなちゃんちゃんこを部屋着の上に着て、下は動きやすそうな履きならしたジーンズがちょっとカッコイイ感じのみい姉さんだが、今僕の腹の上に乗っているみい姉さんはなんとというか「外用」だった。

上は春をイメージしたようなフリルが少しついたレースみたいな服だし、下も脚のラインが綺麗に見える膝下までのジーンズを履いていた。口にも口紅でなく淡いピンク色のリップ系のものを塗っている。怒った顔で台無しだが。

なんとというか今朝のみい姉さんはカッコイイというより可愛かった。きつとこれから出かけるのだろう。などと僕は思ったので聞いてみた。

やままに
「あれ？　みい姉さん今日はまた随分とおしゃれですね。どこか出

掛けるんですか？」

「……なんだと？」

やっと口をきいてくれたみい姉さんの一言目はなんだかとても殺意に近いお返事だった。

あれ？ もしかして怒っていらっしやいます、みい姉さん？

「お前、まさか忘れてたのか……」

どす黒いものがみい姉さんの後ろに見えたような気がしたがとりあえず、何の事を言ってるのか僕には分からなかったので聞き返してみた。

「何がで」

みなまで言う前に思いつきみい姉さんに顔面をぶっ叩かれた。痛い。一体僕が何をしたというんだ。そんな非難の目をみい姉さんに投げ掛けると

ゴスツオリ

また殴られた。しかも効果音が「ゴスロリ」と聞こえなくもないほど食い込んだ。

「痛いです……みい姉さん」

「これは私の心の痛みだと思え」

「意味が分からな」

ゴオリヤ

僕が言い切る前に、とても女性が放てなさそうな拳が僕の喉ぼとけを襲った。

「ぐごお おおお！」

さすがに車に軽く左足のつま先をドラブスルーされても平気なほど、人の痛みと言うやつに鈍感な僕でもキツかった。っというか軽く生命の危機だった。

仰け反ったおかげで、みい姉さんのマウンドポディションを振りほどけたが、それでも僕は暫らく六畳半の室内をのた打ち回った。しかもその間も、みい姉さんは間髪入れずに僕の横っ腹を蹴飛ばしてくる。

一体どうしたっていうんですか、みい姉さん？　いつもの気さくで優しいみんなのみい姉さんはいずこへ？

そして10分後、気が済んだのか、みい姉さんは蹴るのを止めてまだ喉元を押えて蹲すくっていた僕を無理やり立たせて、自分の前に正座させた。

僕は喉を擦りながら、みい姉さんの阿修羅像みたいな殺人的な目で睨み付けられているのに耐えていた。ちょっと快感に感じてきた僕を誰か褒めてください。

「……今日は何日だ」

唐突にみい姉さんは僕に聞いてきた。

「五月五日です」

僕はみい姉さんに即答した。いくら僕が3回ぐらい話したことのあるやつの名前を一字もかすらないで間違えるぐらい記憶力が悪くても、みんな大好きこどもの日、ゴールデンウィークの最終日を忘れるはずがない。

僕のちよつと自信あり気な応答に気を悪くしたのか、みい姉さんは眉間をピクッと微動させた。

「……今日は何の日だ」

苛立つているみい姉さんが僕にまた投げかけた。

「？　こどもの日ですよ」

何でそんな分かりきつたことをいうのだろう。

「……………その様子だと本当に忘れているらしいな」

みい姉さんの眉間の皺しわがより一層深くなり、こちらをガン睨みしてきた。

ダメですよみい姉さん。僕気持よくなってきちゃいましたよ。

……………おつといけない軽くループしてしまった。

しかしそれにしても、何か僕はみい姉さんに怒らせるようなことをしたのだろうか。いや、多分したのだろう。記憶力の悪い僕のことだ、きつと忘れているのだろう。取りあえず謝っておこう。

「すみませんでした」

ゴスッ

僕の愛しいみい姉さんに送った最大謝罪の言葉は、どうやら受け取ってもらえなかったらしい。でも顔は止めてくださいみい姉さん。本当に痛いですから。

「お前、何をしたか分からないのに謝っただろう」

みい姉さんにとって僕の安っぽい心を見透かすのは簡単らしい。

「はあ。すみません。……えっと僕何かしました？」

プチッ

あれ？ 何か最近では死語になりつつある効果音が聞こえたよう
な……

「お前！ よくもいけしゃあしゃあとそんなことがぬかせるな！」

「へっ？」

みい姉さんがいきなり僕の寝巻の襟を掴み擦じり上げてきたので
間抜けな声がつい出てしまった。

「今日はこの前の、お礼をしてくれる日だろうが！」

「……あっ」

そう言えば、ついこの間、と僕はみい姉さんとあるやり取りをし
たことを思い出した。

もう桜がヒラヒラと散ってきた四月二十九日、日本的にはみどりの日、僕はつい一ヶ月前に引越してきたばかりで、右も左も分からない状態だったが、そんな時に親身になつて僕に接してくれたのがみい姉さんだった。彼女のおかげでわずか二週間である程度の土地勘も身につけることができたし、ゴミを出す日も叩き込まれた。そんな訳でそのお礼をしたいとみい姉さんの部屋に僕は訪れていた。「いいよ別に。お礼なんて」

みい姉さんはまだ仕舞い込んでないコタツに入りながら向かいに座っていた僕に向けて左手を左右に振って軽く微笑んでいた。なんというかこういう笑い方ができるのは正直うらやましい。

「いえ、でもこんなにお世話になってお礼の一つもしないのは何だか悪いような気がして」

「こういうのは先住者の義務なんだ。そんなに気を使わなくてもいいよ」

そういつてみい姉さんは季節外れの蜜柑を抜き始めた。コタツといい、ちゃんちゃんこといい、みい姉さんは寒がりなのかもしれない。

みい姉さんは手早く、持っていた蜜柑の半分をもぎ取り「お前も食べ」と言つて、僕にくれた。

お礼をしに来た立場なのに施しを受けてしまった。ちょっと強引にいくか。

「別に気を使つてるわけじゃないですよ。みい姉さんだから何かしたいんですよ」

「!.....あゝ、んゝ、そ、そうなんだ」

なんだか、みい姉さんの頬が少し赤くなったように見える。やっぱりそのちゃんちゃんこは暑いんじゃないのだろうか？

「ええ、なんでもおっしゃってください」

「ん、ああ、いきなりそう言われてもなあ」

そう言つて、みい姉さんは考え始めた。

しばらくして一通り考え終えたようで、みい姉さんが口を開いた。

「そ、そうだなあ。.....え、えい」

「エイ？」

軽く空耳してみる。

「いや、その、映画がいいかな。.....その見てみたいのもあるし少し目線を逸らしてみい姉さんは僕にそう言った。

「映画ですか。いいですね。みい姉さんはどんな映画見ます？」

純粹にみい姉さんが見る映画に興味があつた僕は聞いてみる。やっぱり男気溢れるアクションものか仁侠じみたヤクザものだろうか？

「えっ!?!? そ、そうだな。.....えっと、その、なんだ、.....笑わないか？」

「笑いませんよ。たかが映画のジャンルじゃないですか」
「そうだよな！ はは、何言ってるんだろ私」

みい姉さんは右手を髪の後ろにおいて左手を前に出してぶんぶん振った。

焦っているみい姉さんを見るのはとても新鮮で、なんだかすごく可愛く見える。でもなんで焦ってるんだろう？

「それで、みい姉さんが見たいのって何ですか？」

「あ、ああ。それじゃあ……『恋海』が見たい、かな」

みい姉さんは僕から視線を逸らしてそう言った。

「……『恋海』、ですか……」

僕は少し、みい姉さんを勘違いしていたのかも知れない。やはりみい姉さんも女性で、アクションものより、どこぞのホストと妊娠したのなんのという有り触れた恋愛の方が好きなのかもしれない。本当に勝手だとは思うが、僕の中でのみい姉さんのイメージが少しだけ崩壊した。でも、うん、少しだけ、少しだけ。

「あ、いや！ やっぱりダメだよな。そういうのは男と見に行くもんじゃないよな」

「……」

それは、個々それぞれの自由だと思いますが、みい姉さん。それよりか僕はそこに行つて僕らの前なんかで、肩を寄り添いながらそれを見ているカップルを僕が蹴飛ばしそうなのが心配です。

そんなことをちよつと考えていると、僕の無言の状態を、みい姉さんは「NO」の返事と勘違いしたのか。

「……あ、ん、やっぱり映画じゃなくて、別のにしようかな。はは」

そんなことをみい姉さんは目をコタツの上のミカンを見ながら言った。

ズルイですよ。みい姉さん。そんな残念そうな顔を見せられたら、どうにかしてあげたくなくなっちゃうじゃないですか。

やはり、こういう事は男の方から誘うのが、もしかしたら僕の中

で特に欠如している「常識」なのかなあ、と思いながら僕はみい姉さんに言った。

「わかりました。その映画に行きましょう！」

自分でも驚くくらい大きな声が出たせいか、みい姉さんは少しフリーズしてしまった。

「……あつ、別に無理しなくてもいいんだぞ？」

「いえ、僕もちょうど見たいと思ってたんですよ。ほら、僕って流石とかそういうのに疎いんで」

半分は本当のことを言っている僕。

「そ、そうか！ じゃ、じゃあ、いつにするか決めないとない！」

嬉しそうにみい姉さんはニヤニヤと笑った。

その顔を見られただけでも、僕としてはお金を払いたいくらいの笑顔だったので、喜んでもらえているようだ。うん、人間半分は嘘をつかないとね。

「僕は何の予定もない暇な大学生なんで、いつでもオツケイですよ。何だったら明日でも僕は構いませんよ」

「ああ、じゃあ明日……」

みい姉さんは喋っていた途中、考えるように顎にこぶしを添えて眉間に皺を寄せてしまった。

「……？ どうしたんですか？」

「……えっと、その、そ、そうだ。私、明日はバイトがあるからちょっと行けないんだよな」

「あれ？ みい姉さんってバイト、土日だけじゃなかったですか？」

「え？ ああ！ ほら！ もうゴールデンウィークに入ったたる、それで色々忙しいんだよ」

「なるほどです。そしたらゴールデンウィーク中は時間が取れなさそうですね」

「い、いや、五日のこどもの日は空いてるからその日にしよう。うん」

「分かりました。それじゃあ、時間はどうします？」

「私が後でお前に知らせるよ」

「了解です。じゃあ、話もまとまったんで、そろそろお暇しますね」

「あ、ああ。おやすみな」

「ええ、おやすみなさい」

そう言っただけで僕は自分の部屋に戻った。

さっきの様子から見て、みい姉さんは随分とその映画にご執心のようだ。

ちよつと嫉妬。

その四日後、バイト帰りのみい姉さんに、「メールは毎日確認しとけ」と言われたので、毎日五十件以上くる困ったメール主のために放置状態になっていた携帯を僕は見た。同じ送信者のメールの中に一つだけ違った送信者のものが二日前に受信されていた。みい姉さんのだ。

「5月5日、10時、谷川山駅の前の昼寝猫像前に集合！」

と書いてあった。一体何の事か分からなかったたので、返信してみました。

「なぜですか？」

しばらくして、みい姉さんから返事が返ってきた。その間にも困ったさんメールが二件ほど来たが、みい姉さんのだけを開いた。

「忘れたのか！！ 例の映画の件だ！！」

……すっかり忘れていた。どうにも僕の記憶力は四日と持たないらしい。

素直に謝るのは、本当に忘れていたことを相手に教えるようなものなので、とりあえずその件についてだけまた返信した。

「『恋海』楽しみですね。明後日が待ち遠しいです。」

また半分嘘をつく僕。ついでに映画のタイトルを思い出すのに10分かかった。その間に新たに困ったさんメールが四件入っていた。そして、みい姉さんの返事が返ってきた。もちろんその間に困ったさんメールが三件入って来て、のうち一件は「浮気してないよね？」

というものだったが、みい姉さんのだけを開いた。

“私も楽しみにしてるw 遅れんなよw”

うん。機嫌を損なわずに済んだようだ。そう思って僕は携帯の電源を切って、床に置いた。

しかし、なんでわざわざメールで知らせたんだろうか？ 同じ屋根の下に住んでいるのに、それに待ち合わせをする必要はあるんだろうか？ 一緒に行った方が楽しいと思うんだけどなあ。

……………まあいいか。とりあえず、明後日を忘れないようにしな

いど。
次の日、僕はそのことで出かけた。

そんでもってその翌日、つまり現在。

どうやら僕の記憶力は一日と持たないらしい。

そしてその報いが今こうして、みい姉さんから受けている。しょうがないことだ。

「思いだしたみたいだな」

腸が煮え繰り返るといふものを他人を観察して感知できたのは、今日が初めてだった。

「すみませんでした。えっと、今、急いで準備しますんで」

そう言っただけに着替えようと思ったが、みい姉さんは僕の襟を放してくれず、さらに擦じり上げた。

「がう、ううう、苦しいです。みい姉さんうう」

「今、何時だと思う。ねぼすけ君？」

みい姉さんは嘲笑うような言い方でそう言った。

何時ってまだ朝でしょう？ 僕は毎朝六時に自然と体が起きるようになってるんですよ。だから今は大体、六時半ってところでしょ？
と思いつつ、自信満々に時計の方を向くと、

三時半

やままに

……あれ？ 時計が壊れたのかな？ いや、待てよ。そういえば、今朝は六時起きて、何も用事がないから二度寝したんじゃないかなかったっけ？ うーん。どうやら僕の記憶力は九時間程度で忘れてしまうものらしい。

やたらと寝苦しいと感じた朝日は、どうやら昼（ちょっと過ぎ）日だったらしい。

そんなことを悠長に考えていたら、今にも噴火しそうな活火山の火口いるかのようなとても熱いものを感じたため、冷汗が通常の三倍速で流れた。

「……ええつと、さ、三時半ですね……」

ぎこちなく僕がそう答えると、

「そうだ。お前がぐうすか寝ている間、こっちは寒空の下、五時間も待たされたんだ」

みい姉さんはさらに僕の襟を握る力を強くした。
ぐ、ぐるじい。

「それでお前に用事でもできたのかと電話しても出ないし、諦めて帰って来てみれば、お前はそれはもう気持ち良さそうに寝てるじゃないか。なあ！」

本当に忌々しそうに、みい姉さんは僕の首と体を引き離すかのように襟を交差させる。

ぎゅ、ぎゅるじい。

「しかも起きたら起きたで、すっかり今日の約束をお忘れになっているようじゃないか。女一人をこの寒空の下に五時間もほっという、いい御身分だな」

怒りを通り越した様子のみい姉さんは、僕の襟を頸動脈が締まるくらい襟を引き絞る。……ああ、段々気持ち良くなってきた。なんだか、お花畑が……み、見える。

そんな僕の様子を見たのか、みい姉さんは投げ捨てるかのように僕の襟から手を離れた。……げほっ、苦しかった。

やままに

「……………」

みい姉さんは無言でまた僕を睨みつけてきた。

人との衝突は何度か経験したことがあるが、こつも一方的に自分に過失がある状況を体験したことがない僕は、咄嗟にその場を取り作るような言葉しか話せなかった。

「すみませんでした。でも、まだ今から行けば、映画、間に合いますよ。すぐ準備するんで。帰りにどこか食べに行きましょう。奢らせて下さい」

僕は、思いついた謝罪の言葉を並べた。もちろん。言葉の後にだつて気持ちは付いてくるものだから。お詫びをするつもりは満々だ。

「……………はあ」

みい姉さんはため息をついた。そして、人生で二度目であるその「目」で僕を見た。

すべての感情を通り越して、ただ虚構を眺めるような目だ。要は、失望されたということだ。

前に両親が喧嘩して、母親が家を出ていくと言ったとき、母は自分についてくるように僕に言った。しかし、僕は断った。母が何故なのかと聞いてきたので僕はこつ答えた。

父さんの方が経済的に樂できるから。と、

その時に母はその「目」をしていたことを覚えている。何も期待しない。愕然、失望、落胆、そんな言葉が目には込められていた。

ついでに僕はその時八歳だった。

「もつ……………いい」

そつ言つて、みい姉さんは僕の部屋を後にした。立てつけの悪い扉の音と共に。

「……………」

急に静かになつた部屋は寂しいものがあつた。

正直、越してきて一ヶ月ちよい、こんな事が起こるとは思わなかつた。

もちろん。僕が約束を放棄して自室で寝ていたことがすべての元凶だ。

しかし、みい姉さんが怒った理由はそれだけじゃないような気がする。

感情表現が人より乏しい僕は、もしかしたら、口にした一言ひと言が癪に障る言い方になっていたかもしれない。

みい姉さんは寒がりみたいだから、まだこの春のポカポカも、みい姉さんには肌に刺すような冷たさだったのかもしれない。

「うーん。何か……違う」

自分でも分かるけど、解らないものがある。

こういう時に、さわりなく相手と対話ができるようなスキルを持つていたらどれほどいいことかと思う。

しかし、昔から一人でいることが好きというより、一人でいることが自然であった僕にはそんな能力は一向に身に付くはずがなかった。

もしかしたら、無理に人に関わったことが不味かったのかもしれない。

ここの住民は皆、普通とはちょっとだけ違うことに慣れた人たちだから、いや、むしろ、馴れ合いではなく、信頼。たわむれではなく、共存。だから僕はそんな関係が居心地がよかった。

この一ヶ月色々と非日常なことが起こった。それでも僕はそんな関係が長く続いていくのも悪くないとも思った。

でもそれはやはり無理なのかもしれない。

所詮、僕は僕でしかない。

「でも……」

やはり、これはとても嫌な感じだ。まるで人を弄んでいるみたいで嫌悪だ。

どうにか頑張って、みい姉さんから信頼を取り戻そう。いや、たった一ヶ月の付き合いで信頼もくそもないが。

ふと、部屋に机の上に置いてある。包みを見た。

昨日、みい姉さんへのお礼として買ったプレゼントだ。中々見つからなかったので、一日中歩き回って見つけたものだ。

やままに

「さて……。どうしようかな」

部屋にいても、何も思い浮かばなかった。

「ちよっと、出るか」

そう言って僕は、少し荒れた部屋を後にして、外に出た。

僕はこのやま木山緒獅子おれおと書かれた名札の下に、「外出中」という札を差し込んだ。

第二話〜帝奈ちゃんと僕〜（前書き）

お隣のみい姉さんと喧嘩してしまった僕は仕方なくその怒りの原因を探しに外に出たがそこで……

やままに

第二話〜帝奈ちゃんと僕〜

外は、僕の気分とは裏腹に雲ひとつない快晴で、少し風が強い気もするが、まだ傾いたばかりの春の夕日のおかげで暖かかった。

僕はチラツと隣の「202号室」を見た。いつもと変わらない、あまり扉に相応しいとは言えない厚さの薄い202号室の扉が、今の僕には見るからに重厚で押ししても引いても開かない強固なものに感じた。みい姉さんの部屋だからだろう。頑なに僕を拒絶しているように見える。

山の間荘は築三十年のそれなりに歴史のあるアパートで、見た目もけして綺麗とは言えないが、建物は二階建てで、一階が101号室から103号室、二階が201号室から203号室、と一つの階に1DKの部屋が三室あり、部屋はバス・トイレ別で、ネット回線が繋がっていて、各部屋にエアコンが一台ずつ常備してある。駅からも徒歩10分で、家賃も三万五千円とかなり安く立地条件はかなり良い。

金のない貧乏学生やフリーターにはとても魅力的なこのアパートだが、唯一問題があるのは大屋さんと面談をして入居許可を貰わないと住めないという点だ。みい姉さんの話ではこれまで何人もその面談を受けているが、入居許可をもらったのは僕が二年ぶりだそうだ。ついでに僕の部屋は203号室で、みい姉さんのお隣さんでもある。

……お隣さんなのに喧嘩しちゃったよ。

がつくしと首をうな垂れながら鉄の階段をカツンカツンと降りていると、カタカタとキーボードを打つ音が聞こえてきた。

その音をたどって見てみると、アパートの中庭にまだ三ヶ月は早いだろっぴーチパラソルを突き刺して、折りたたみ式のピーチチェアにちょこんと座っている女の子がいた。

僕がそっちの方に近付いていくと、その女の子はノートパソコン

の画面から目を離してこちらにその可愛らしいクリっとした目を向けた。

「あら、こんにちわ。みい姉さんと喧嘩中のレオ君」

……………

「相変わらず情報が早いね、帝奈ちゃん^{テイナ}」

「ここから一部始終を眺めていたからよ」

……………朝からとんでもないのを見られちゃったな。ん？ いやもう昼過ぎだっけ？

「……………それより僕を呼ぶ時は『君』は取ってちゃんと名前で呼んでほしいんだけど」

「あらどうして？」

「どうにも『君』っていうのは『君主』の『君』に思えてしょうがないんだ。僕は人の上に立つのが苦手だからね、どうしても頭の片隅にその言葉が引つ掛かってむずかゆいんだよ」

「そう、なら私を呼ぶときに『ちゃん』は付けないでほしいわ。私、どうしても『ちゃん』は『ちゃんこ』の『ちゃん』に思えてしょうがないの。私は太ってる人って怠惰なイメージしか浮かばないからお相撲さんとか苦手なのよね」

「残念だけどそれはできないな。だって帝奈ちゃんって呼んだ方が、帝奈ちゃんが百倍可愛く見えるからね」

「そう、じゃあ残念だけどレオ君から『君』は取れないわ。それにレオ君って呼んだ方がレオ君の変な名前が他人に露呈しないで済むもの」

「そう、変な気を使わせちゃって悪いね」

「別に構わないわ。ただ変な名前の人と同じアパートに住んでるところを知られたくないだけですもの」

「そうかい」

「そうよ」

いつも通りのちよっとした言葉遊びをして僕たちは挨拶を交わした。

僕の目の前にいる、またノートパソコンに視線を戻した少女は、103号室に姉妹で住んでいる二田見^{ふたみ} 帝奈ちゃん^{テイナ}。小学五年生。今日みたいに学校のない日は、一日中友達とも遊ばずに株という名の折れ線グラフと睨めっこしているちよつと変わった子だ。お姉さんの凧鶴^{なづる}さんが稼いできたお金を、帝奈ちゃんは五倍十倍にして、二田見家の金庫を潤しているらしい（凧鶴さん談）。

小学生の頃と言えば、僕は実家が比較的田舎だから、川に友達（といっても二人しかいなかったのだが）と泳ぎにいたり、山の中を散策していたりした、そんな頃のはずだ。いくら少子化プラス高学歴化したとはいえ、友達と遊ぶつてのはごく当たり前だと思っ。もしかしたら、友達が出来ないからパソコンをいじるようになって、それで株を始めたのかもしれない。……ああ、ちよつと帝奈ちゃんが不憫に思えてき

「とても失礼なことを言われたようなオーラが見えたわ」

「……………ても、きつとそれは僕の思い過ぎだ。」

「帝奈ちゃんはスピリチュアルを信じてるの？」

僕は感づかれたら負けだとばかりに話を進めた。

「基本的に全然信じてないわ。でも信じてもいいわ。お父さんたちを見つけてくれるなら」

帝奈ちゃんたちの両親はどこぞの執事ばりに借金を子供に残して逃走を続けているとんでもな方々だ。帝奈ちゃんはクールな性格だが、やっぱり年相応というのか、親がいないと寂しい年頃なんだな。「そしたら、思いっきり裁判で慰謝料ぶんどくつて、ゴミのように刑務所に入れてやるのに」

「……………うん！ 今日帝奈ちゃんは元気いっぱいだ！

「ところでレオ君は、どうしてみい姉さんと喧嘩したの？ まあ、大方今日のデートをすっぱかしたが主な原因だとは思っけど」

急に話を振られたと思ったら、いきなり核心を突かれてしまった。本当に油断の出来ない小学生だよ。

多分回りくどいことを言ってもイライラさせるだけなので、大ま

かな要旨だけを帝奈ちゃんに話した。

「……ってわけなんだ」

「レオ君、いつペン死んでみる？」

「幸いサイトにアクセスした覚えはないから遠慮しておくよ」

「間違えたわ。お願いだから今私の前で首を吊って」

さっきのみい姉さんとのやり取りを説明した途端に帝奈ちゃんは不機嫌になったようだ。ところどころ端折ったりはしたが、誤解を生むような言い方は避けたと思うのだけど、なぜだろう。

「なぜそんなこと言われるのか分かりませんって顔してるわね」

「……僕の知らない間にエスパー能力に目覚めたのかい？」

「残念ね。女性はそんなくんだりない力より便利な『女のカン』っていうのが初期装備でつけられているのよ」

帝奈ちゃんはまだ「女性」じゃなくて「女の子」だと思ったことは黙っておこう。

「ところで、僕には待ち合わせに遅れて映画が見れなかったことしか、みい姉さんが怒った理由が分からないんだけど、やっぱり他にあるのかな？」

何か引つかかるところというより、それがあまり想像できないことなのか、他の要因が頭に浮かんでこない。

「……はあ」

帝奈ちゃんは幻滅したというような溜息をわざとらしくついた。

「本当にみい姉さんが可哀相だわ。こんないい加減な男が隣に住んでるなんて」

おやおや物凄く失礼なことを言われたような。

「レオ君。みい姉さんが怒った理由を知りたいと本当に思ってる？」

「思ってるよ」

この問いには即答できる。みい姉さんと嫌な雰囲気関わっていくことほどこのアパートに住んでいて残念なことはないから。

「……なら、それは私に聞くんじゃないか、自分で考える事よ」

「それでもわからなかったら聞いてもいいかい？」

「とことん最低ねレオ君。最初から他人任せの姿勢で、本当にみい姉さんのことを考えているなんてよく言えるわね」

帝奈ちゃんの口調が少し強くなった。

「本当になんでみい姉さんはこんなのが」

何か言いかけて帝奈ちゃんは口を閉ざした。

「……。ともかく、自分でもっと考えることね」

そう言っただけで帝奈ちゃんはパソコンに目を落として、カチカチと操作し始めた。どうやら、もう言うことはないということらしい。僕も散々帝奈ちゃんに絞られたので、黙って外に向かって歩き出した。

「レオ君」

アパートの入口の扉に差し掛かったところで、帝奈ちゃんが呼びかけてきた。

「どうしてもわからなかったら、银杏公園に行きなさい。まだいると思うから」

それだけ言っただけで帝奈ちゃんはまたパソコンに視線を戻した。

「ありがとう」

僕はそう返事してやままに荘を後にした。

帝奈ちゃんはクールだけど優しい女の子だ。正直言っただけの飴と鞭の使い方は僕も見習いたいといつも思う。

そんなことを考えているとふとある言葉を思い出した。

「愛情の対義語は憎悪ではなく、無関心」

僕は怒ってもらえることがどんなに幸福なことなのかを忘れていたのかも知れない。

みい姉さんの気持ち。

どう思ってるのだろうかなんて僕にはわからない。

でも、帝奈ちゃんは僕を叱ってくれた。

考えてみよう。悩んでみよう。

僕はそう思った。

第三話〜玄一さんと僕〜

帝奈ちゃんと別れてから十分後、僕は銀杏公園いちようの入り口に来ていた。
「考える間もなく着いちゃったな……」

よくよく考えてみれば、徒歩十分の間に考え事をまとめようとするのは無理な話。

助言を受けれてすぐにこちらに足を運んだ僕のいい加減さには自分でも呆れるところがある。

銀杏公園は名前の通り、銀杏の木が道沿いに植えられた均整のとれた外観の公園で、住宅の一角にある小規模のものとは異なり、それなりの広さのある公園である。

「しかし、銀杏公園にすればいるって言ってたけど、何がいるんだ？」

犬？ ネコ？ いやいやもちろんホモサピエンスのことだろうけど。

といつても夕方とは言え、休日の公園には多くの人がいる。

さすがにここにいる人たちにみい姉さんの話をして12割方わからないだろう。下手に「みい姉さんと喧嘩しちゃって困ってるんです！ 助けてください！」などと尋ねれば通報されかねない。

うーん。一体誰のことなんだ？

「……………まあ取りあえずどこかに座るか」

別に足が疲れていたわけではないけど、起きてからというものの精神的に疲労が溜まっていた。

ちょうどカップルがそれまで独占していた三人掛けベンチを離れたので、そこに落ち着くことにした。

「……………ぬくい」

人のぬくもりというのは普通は求めるものだが、このぬくもりは正直遠慮してもらいたい。っていつても無理な話だけ。

「ふうふう」

やままに

僕は茜色の空を見上げながら深いため息をついた。
みい姉さんの気持ち
わからない。

けど喉の先まで出かかっているものがある。
きつとこれが答え。いや妥協点なのだろう。

自分の力ではこれ以上、上に上ることができないものがある。

「……そういえば、『まだいると思うわ』って言ってたよなあ」

まだいると言うことは、時間が決められた、もしくはそう決めている人がいるのかもしれない。

「歩くか……」

そう言っただけは立ち上がり並木道を道なりに歩いた。

銀杏公園には芝の植えられた開けた場所がある。大抵は、フリスビーやらゴム飛行機やらゴムボールと一振り曲がるプラスチックバットを傍にある売店から買ってきて遊ぶのだが、今日はその売店の横に屋台が出ていた。

近づいて見てみればそれはたこ焼き屋だった。

店を覗いて見てみると、まだ春だというのにステテコ姿の角刈りのおっちゃん（屋台のおじさんはおっちゃんと呼ぶことは僕のポリシー）の後姿が見て取れた。

「おう、いらっしやい！」

ツンと抜けるような気迫のあるもてなしの言葉が耳の中で反響する。

振り向いたおっちゃんは僕を見ると少し驚いたような顔をした。

多分相手も僕の顔が珍しく表情に富んだ驚きの表情をしていると捉えられただろう。

「玄一さん……」

「こりゃ驚いた。獅子坊じゃねえか！」

玄一さんは、山の間荘と山一つを境に対角線側にある「川の瀬荘」の住民で、本名は筒野木玄一。初めて会ったのは四月の中旬で、そ

れ以来僕は玄一さんに「獅子坊」と呼ばれている。

「……たこ焼き屋さんだったんですか？」

確かに屋台のおっちゃんと言うのは玄一さんには型にはまり過ぎるほど似合っているが、実物で見るとどうにも違和感が生じる。

「おいしい。半分正解だな」

「半分ですか？」

半分どころかほとんど正解な気がするんだけどな。

「実はな……」そう言って玄一さんは顔を僕に近づけて小声で言う。「ちつと野暮用で、ここしばらくは事務所に顔を出せなくなってる。今は食いぶちを稼ぐ為の飯の姿をしてるわけよ」

「そうなんですか……」

事務所ってなんのだろうと考えたら負けだよな……

「まっ、そういうわけだからよ。よかつたら俺の家計を助けると思っただけでいいよ。数を買っただけなら安くしとくぜ！」

「じゃあ、一パックで」

「……おいおい、いいのかい？俺のたこ焼きはお前んとこの助おなみが五は軽く平らげるほどの旨さだぜ。一つじゃ、口が寂しいことになっちゃうぞ」

玄一さんは口を開けて豪快に笑う。

……ん？今、みい姉さんのこと何気に言わなかったか？

「玄一さん。みい姉さんってよくここに来るんですか？」

「おうよ。今日は見なかったが、ここんとこ毎日のように顔を出すぜ」

みい姉さんが毎日のように……あれ？何だか体の中からダイクなものが入り込みにくくなる。

……随分。気に入ってるんですね玄一さんのたこ焼き「少し刺を付けて言ってしまったが、玄一さんは気にした様子もない。」

「おうよ。お前も一つを言わずもって買って行って」
清々しいほど大声で玄一さんは笑う。

「じゃあ十下さい」

「まいど！ 知ってる仲だ。特別価格で三千でいいぜ！」

ちよつと悔しかったので調子乗って十なんて言ってしまったせいで、野口さんが三人も僕の携帯型金庫（要は財布）からいなくなっ
てしまった。まあ別にいいんだけど。

早速、注文を作り始めた玄一さんは随分と手慣れていた。結構長いことやっているのかもしれない。

玄一さんの作業を見ながらポーツとしていたが、ふと思った。

（もしかしたら帝奈ちゃんが言っただのって玄一さんのことかな？
確かに「まだいると思う」と言うことは、予めここで何かしていること事前に知っているとということだしそうなのかもしれない。

そんなことを考えていると玄一さんが話しかけてきた。ちよつど具を入れ始めたところだ。

「そう言えば、恋春こいはるのやつがお前から連絡がないからきつと新しい女が出来たんだって、昨日きのう樹奈きよなの部屋で騒いでたぞ」

「……新しいも何も僕は彼女と付き合ってますらいませんよ」

「そうなんか？ あいつはどこ行ってもお前の話しかしねえから俺はてつきりもう出来てんのかと思ってたが」

「気のせいです」

僕はきつぱりと言った。

「そ、そうか……」

僕の鬼気迫った言動に驚いたのか。少し玄一さんは間が悪そうに答えた。

「しかし、恋春は性格は確かにあれだが、見た目はかなりの上玉だぞ。そんなやつに迫られてるのにその態度。……お前、玉ちゃんといてるのか？」

玄一さんは品定めをするように僕の方を見てくる。

「ちゃんと付いてます。ついでに機能の方も玄一さんには負けませんよ」

僕は自分の安いプライドを軽く傷つけられたので、悪態をついて

言い返した。

「おつ、言うようになったじゃねえか。まあいつの時代もモテる男は辛いよな!」

玄一さんは僕の憎まれ口に気も触れない様子で、豪快に笑い飛ばした。

「ってか」

「玄一さんはモテてたんですか?」

「何言つてやがる。今でもモテるんだよ! かああ、お前にはまだわからんかねえ。この体から染み出る男気が!」

「加齢臭の間違いじゃ……」

「なんか言つたか」

「いえ! 何も!」

玄一さんのどすの利いた声はととても怖かったです。

「つと、ほらよ。出来上がったぜ」

玄一さんは出来たての香ばしい香りと共にビニール袋に入ってたご焼きを手渡してくれた。

「じゃあ、お代ここに置きますね。……では」

そう言つて去ろうとする僕に玄一さんはこう言つた。

「何があつたか知らんが、俺のたご焼きできつかけでも作つて解決しろよ! 女がらみの厄介事は長引かすと苦労するからな」

さっきのちよつとしたやり取りで、玄一さんは何かに気づいたようだ。

「どうも僕には苦手な問題ですからね。嫌でも長引くかもしれませんよ」

「得意なやつなんているか! わからねえなら分からんなりに正直に自分のことを言えばいいんだよ」

玄一さんは励ますように僕に語る。

「……それでも駄目な場合は?」

僕がそう言つと、玄一さんは力強く僕の背中を叩いて言った。

「謝れ。謝つて謝り通せ!」

ちょっと転びそうになったが、なんだかモヤが晴れるような一撃だった。

「ありがとうございます」

僕がそう言うと

「何言ってるやがる。客へのアフターサービスってやつだ。これも料金に入ってるんだよ」

「……格安ですね」

そう言ってる僕は今度こそ家路に向かった。後ろから「頑張れよ！ 青年！」と聞こえてきて僕は少しだけ頬を緩めた。

帰ってる途中に、玄一さんは何だかみい姉さんに似ているかもしれないと思った。

川の瀬荘では、山の間荘のみい姉さんのように、玄一さんがその役割を担っているように思えた。

第四話〜三人で

僕がやままに荘に帰って来たのは、日が沈んで一分と経たない時だった。

玄さんのたこ焼きから立つ蒸気が僕の左手を生ぬるく温めている。たこ焼きを買っておいてよかったと僕は思う。もしこの左手に何の重みも温度もなかったら、きつと僕の左手は緊張と冷え切った血液でガクガクと震えていただろうから。

「……………」

正直に言えば、決心はついていない。

なんでみい姉さんが怒ったのかわからないし、何を謝ればいいのかもまだわかっていない。

玄さんは自分の正直な気持ちを伝えればいいと言った。

正直な気持ちとはなんなのだろう？

スーパーに買い物に行ったとき、買うか迷っていた弁当に二割引きのシールが貼られた時の喜びみたいなものだろうか？

それとも、電車で自分の隣にいたいかにも真面目そうな男性が痴漢と叫ばれ、事務所に連れてかれる様子を見てしまった居た堪れない気持ちだろうか？

多分そうであってそうでない。的を得ているが、真ん中じゃない。どんなに考えたって、答えは僕では出せないだろう。でもここで立ち止まることはできない。少なくともこの左手に持ったたこ焼きが冷める前に踏みださなければならぬだろう。

「……………うん」

僕はみい姉さんの部屋に行くために階段を登りはじめた。

階段と靴とが発する金属音は僕の心を急かすように叩いた。

アパートの廊下なんていうものはそんな距離があるものじゃないが、その時僕が感じた時間間隔はとても長く、感じた。

202号室。

やままに

みい姉さんの部屋の前。

ここで佇んでも仕方ない。

僕は右手で軽く二回ノックする。

すぐに人が玄関に近付いてくる気配がした。

しかし、すぐにそのドアが開かれることはなかった。

「そのまま聞いてもらえますか？」

僕は相手に聞こえる程度に静かに言う。

相手から返事はない。だが不思議と僕はそれが肯定の意味があるものだと思った。

「……正直いつちやいますと、実はまだなんでみい姉さんが怒ったか分からないです」

少し悔しかった。

「帝奈ちゃんや玄さんにも相談したんですが、答えはわかりません
なんて僕は嫌なやつだろう。」

「でも、」

それでも

「僕は今日みい姉さんと一緒に遊びに行きたかったです」

多分僕はその時震えてうまく言えなかったと思う。

僕がそう言うてから十秒ぐらいの間を開けて、扉が開いた。

そして僕は目が合わなかった。

扉の陰から出てきた帝奈ちゃんと。

「……………」

沈黙とはこのことだろう。

二人は視線が合うように、首を下げて、上げた。

「……………なぜ？」

僕の第一声。

「みい姉さんに留守番をお願いされたの」と帝奈ちゃんは即答。

「ならすぐドアを開けてくれればいいのに」
と恨めしそうに僕。

「不審者とスーツ姿の人がいたら開けてはいけないと言われたの
と滅多に拝めない帝奈ちゃんは笑顔。

「僕はスーツを着ていないんだけど」

と両手を広げてアピールする僕。

「でも不審ではあったわ」

とゴミを見るような目で帝奈ちゃん。

「そうかい」

「そうよ」

そんなコントをしていると、

「人の部屋の前で何ちちくりあってるんだお前らは」

ドスの利いた声を掛けられた。

みい姉さんである。

「あ、いえ、その……」

多分生まれて初めて僕は慌てたと思う。

「みい姉さん。不審者だけどドアを開けてしまったわ」

と帝奈ちゃんが言う。

それを聞いたみい姉さんは片眉を吊り上げて

「ほう、不審だったのか？」

それに答えて

「ええ、とつても不審だったわ」

と帝奈ちゃん。

僕は逃げ場のない戦場に立たされたようだ。

でも逃げよう。

「あのみい姉さん今日はすみませんでした。これよかったです」
そういつて、左手にあったものを渡した。

「これは？」

「玄さんのたこ焼きです」

「……ふむ」

そう言っただ中を覗いたみい姉さんは少し嬉しそう口の端を吊り上げた。

「……そ、それじゃ僕はこれで」

そう言っただ自分の部屋へ戻ろうとしたが、襟を後ろかつかまれた。「随分と量があるな」

みい姉さんはこつちを見ないでそう言う。

「え、ええ。安かったんでつい」

「そうか」

「???」

僕はちよつと混乱する。

しかし、それはみい姉さんの一言で吹き飛んだ。

「寄っただいけ。一緒に食おう」

「はい……っただ、え!?!」

「ちよつと私には量が多いから、片付けるのを手伝えと言っているんだ」

「で、でも玄さんはみい姉さんは五個は軽く平らげると……」

その後の言葉続かない。

なぜならみい姉さんがものすごい目で睨んでいたから。

「お前に答えをやるう。私が怒っていたのはお前のそういうところだ!?!」

そういっただみい姉さんはげんこつを一発僕の頭に突き刺した。

痛たかつた。

でもちよつと嬉しかつた。

「ともかく早く着替えてこい。外着じゃ私の部屋には入れん!」

「は、はい!」

そう言っただ僕は自分の部屋に駆け込んだ。

やままに

私は二人がじゃれあっている姿を見上げながら見ていた。なぜだかとてもムカムカする。

みい姉さんがレオ君を一括するとレオ君は足早に部屋に駆け込んでいった。

私には部屋に駆け込むレオ君の横顔が嬉しそうに見えた。だからかもしれない。ちよつと意地悪してやろうと思った。この目の前の大人の女に。

「みい姉さん」

「ああ、帝奈。留守番ありがとな」

「意地汚いわ盗み聞きなんて」

「え？ な、なんのことだい？」

白々しくもみい姉さんとはばけた。

「『答えをやるう』って、みい姉さんはレオ君が言っていたことをまるで一部始終聞いていたような応え方よね」

「あ、あはははは。た、たまたまだよ帝奈」

この女はまだ白を切るらしい。

「じゃあ、聞いてないのね？」

「ああ、聞いてないよ」

「じゃあ今度の休みにレオ君を誘って遊びに行くわ」

「な!？」

「だって今さつき、このドアの前で『一緒に遊びに行きたい』って言われたばかりだから」

「あ、あれは! 『みい姉さんと一緒に遊びに行きたかった』って言うていただろう! ……って!」

「あれあれ、おかしいわ? みい姉さんは何も聞いてない筈なのになんで私とレオ君の会話の内容を知っているのかしら?」

多分この時の私はとても可愛らしい笑顔をしていたに違いない。
「が、がぐううう……」

みい姉さんは悔しそうにたこ焼きが入った袋を握り占めていた。

ちよつとこの胸のモヤモヤが晴れたような気がする。

しかし、それはたった一瞬で曇ることとなる。

たまたま丁度よくレオ君が着替えて戻ってきたからである。

いや、正確にはそうではなく、悔し紛れに目の前の女がレオ君の腕に自分の腕を絡めてそのまま部屋に押し込んだからである。

もつと正確に言えば、その時困惑した顔から少し幸せそうな顔になったその男の顔を見たからである。

そして、女は戻って来て言う。

「妬くな妬くな」

「……ふん！」

多分その時彼女にはリンゴのような顔の少女がその眼に映ったはずだ。

あの愚かなネコ科の男とは違い、彼女もまた私と同じ聡い女。相手の気持ちを理解できる人。

だからだろう。こんなにも感情が荒れたのは。

「ほら、おいで。一緒に食べよう」

そういつてみい姉さんは私に手を差し伸べる。

「あらいいの？ 二人の時間を邪魔しちゃって？」

「なに、大人と子供には越えられない壁があるわけだ」

だからこんなにも彼女が憎い。

「もしかしたら、こっちの趣味があるかもしれないわ」

「……なら多分、私は好きにはなっていない」

「そうね。そしたら私も好きになっていないわ」

だからこんなにも彼女とそして彼が好きなのだ。

第四話〜三人で〜（後書き）

一応「やままに」完結です。

未熟な作者の作品を読んで頂きありがとうございました。

やままに

やままに

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4257d/>

やままに

2008年11月7日08時02分発行